

6月7日ゼミは開催します

最北の歴史：北海道 擦文・アイヌ文化

—6月7日ゼミ紹介文:倉重 千穂会員記—

北海道の考古学的な文化は古い時代から「旧石器文化」「縄文文化」「続縄文文化」「擦文文化」「アイヌ文化」と移り変ってきた。各文化の移行を見るとグラデーションのように連続的で断続は認められない。

古代の北海道にはサハリンからオホーツク人、本州から和人（本土人）が進出、彼等は最終的にアイヌの祖先と同化した。

近代アイヌのDNAに縄文人にも本土日本人にも存在しないハプログループYがみられることが判明。オホーツク人を含む北東アジアの特有なハプログループが加わったことが指摘されている他、頭蓋骨などの骨の特徴からも同化があったことが推定される。

近年まで研究者は考古学的な「アイヌ文化」と擦文文化が連続的なのか、あるいは断絶があったのか確信がもてなかった。しかし、現在ではアイヌの代表的な祭祀具であるイナウ（弊、木弊）の出現は擦文時代中期の10世紀であることが明らかになった。

続縄文後期の4世紀になると北海道の人々は人口密度が希薄化した東北北部へ南下。

社会が交易に特化して大きく変貌をとげ、狩猟採集民から狩猟採集もする交易民に変わっていった。この時代が**擦文時代**ということになる。

【擦文文化へ】

擦文とは、土器の表面に付けられた「木のへら

擦文土器の使用の始をいうが、擦文土器の使用の始まりは6世紀後葉から7世紀初め（飛鳥時代に相当）にあり、ここから擦文時代が始まる。

擦文文化は四角い竪穴住居に住み、雑穀栽培を行うなど、本州の暮らしを取り入れつつも住居の中は伝統的な囲炉裏を使い、水田は作らないといった北海道の地域性が強く表れた文化だった。

擦文文化期には北海道と本州地域の交易が活発化していて、擦文人たちは本州から鉄製品を手に入れ、本州に魚介類や大量の動物の毛皮が渡っていたと考えられる。

東北北部へ進出した古墳社会の人々の子孫である**蝦夷**は王権の支配に従わず、続縄文人との交易の利権に強く関わっていたと思われる。

このように王権による北方世界への介入が東北北部の蝦夷社会に混乱をもたらし、これが北海道に擦文文化という新しい文化の移行をもたらす契機となったと考えられる。

石狩低地帯にみられる末期古墳や土器、カマドをもつ竪穴住居の在り方等から擦文文化の成立した7世紀には、東北北部の太平洋側から石狩低地帯へ蝦夷集団の移住があったとみられる。この本州からの移民は農耕民であり、アイヌはその農耕文化を取り入れ、活発に農耕をおこなう。移民はまた古代日本語を話し、古代日本の祭祀の文化をもつ人々であり、アイヌの宗教と儀礼に影響を及ぼしたという。

最新の遺伝子研究ではアイヌの祖先集団（擦文人）と本土人の混血した時代は7世紀頃と推定され、移住者の遺跡は9世紀代になると見られなくなるが、擦文人に同化したと考える。

集落は2~3軒くらいが単位とみられ、一方100軒を超えるような大集落もあった。大集落はサケ・マス漁の共同作業を行う為の秋から冬にかけての集落で、その他の季節は小集落に分散して生活したという見解もある。生業はサケ・マスの漁労を中心に、採集・狩猟、更にコメ以外の雑穀の栽培文化が加わって、安定的なサイクルが出来上がっていたのではないかと。

擦文人たちは、東北北部に南下しただけではなく、9世紀の終りになると、全道に一気に進出した。

それまでオホーツク人が占拠していた道北や道東オホーツク海側の地域を避けて暮らしていたが、これらのオホーツク人たちは擦文文化の影響を受け、「トビニタイ文化」に変容した。しかし、擦文人の功勢のなかでトビニタイ人は次々擦文人に同化され、成長をめざす擦文人によって排除されていく。このオホーツク人との関係は擦文人にとって大きな意味をもっていた。

擦文時代からアイヌ文化の時代にかけて、人々はサハリンや千島列島へ進出して活発な交易活動を繰り広げる。

擦文文化の終末は土器の消滅をもって規定される。本州から鉄鍋と漆塗椀を移入し、土器をつくらなくなったことを意味している。12世紀頃、北海道では擦文文化期が終わり、独自の言語や習俗、信仰などを擁するアイヌ文化が醸成される時期となる。

【アイヌ文化へ】

「アイヌ」とはアイヌ語で神に対する「人間」を意味する。彼らは北海道を中心に本州北端、サハリン南部、千島列島、カムチャッカ半島南端という広大な地域に住み、アイヌ語という共通の言語を用いた。

交易で経済力をつけたアイヌは和人文化やオホーツク文化を吸収しながら、新たな民族文化を築いていく。竪穴住居は平らな地面に建てる四角形のチセになり室内隅にあったカマドは中央で火の神に祈る炉に変わった。

北方に端を持つ熊送り（イオマンテ）はムラ社会最大の集団儀礼として高度に発展した。

アイヌが広大な北東アジア世界に進出しながら本州との関係をさらに深め、交易を拡大していった時代である。

擦文文化からアイヌ文化への移行は、社会体制からみれば連続的であり、人の入れ替わりや断絶があったわけではない。

この様に縄文人の直系であるアイヌは北海道の歴史の早い時代から積極的に本州やサハリン・千島列島からカムチャッカ半島まで広大な地域に生活圏を広げた。

その目的は本州の鉄製品などとサハリンや千島のオオワシの尾羽やラッコなどの毛皮との交易にあった。

ここでは擦文文化からアイヌ文化の流れについて簡単に記した。

ゼミでは「北海道の古代史」について具体的に発表したいと考えている。

アイヌという人々について私たちはどのようなイメージを持っていたのだろうか。実は近世を除けば、北の狩猟採集民アイヌについて記録した文字資料がほとんどなく、私たちはアイヌを日本の周縁や辺境の人々とみなし、その歴史に対して正面から向き合うことがなかったのではないかと 以上

ゼミ会場と時間 13:15~16:50

- 1、全水道会館（水道橋駅）・中会議室（5階）
- 2、JR又は都営三田線水道橋駅下車徒歩2分
都営三田線水道橋駅はエレベータ使用可。
- 3、会場には12時30分から入場できます。

以上。

埼玉稻荷山鉄剣の辛亥の年は 531 年、ワ

カタケル大王は欽明天皇である。

（100%間違いはない！）

—飯田 真理会員記—

1. 欽明元年について

①》仏教公伝からわかる欽明即位年

上宮聖徳法王帝説と元興寺伽藍縁起并流記資財帳においては、仏教公伝は欽明大王時代の538年とする。

【史料 a】上宮聖徳法王帝説

*現存する聖徳太子伝記としては最古のものである。

「志癸嶋天皇御世戊午（ぼご）年（538年）十月十二日 百濟國主明王 始奉度佛像 僧等勅授蘇我稻目宿祢大臣令興隆也」

*百濟の聖明王から仏像を貰ったのは、欽明大王の時代の538年ということである。

記紀において、538年は宣化大王の時代とされているが、これは虚偽であり、538年は欽明大王時代が真実である。

【史料 b】元興寺伽藍縁起并流記資財帳

天平十七年〔745年〕、奈良元興寺が完成して、その言われを記録したものである。

「大倭國佛法 創自斯歸嶋宮治天下天國案春岐 廣庭天皇御世 蘇我大臣稻目宿禰仕 奉時 治天下七年歲次戊午（538年）十二月度 來 百濟國聖明王時 太子像并灌佛・・・」

*仏教公伝は、欽明大王7年の538年ということである。

これより**欽明即位は531年**なのである。

②日本書紀が引用する百濟本記での辛亥の変

【或本云 天皇 廿八年歲次甲寅崩 而此云廿五年歲次辛亥崩者 取百濟本記爲文 其文云 太歲辛亥三月 軍進至于安羅 營乞屯城 是月 高麗弑其王安・・・又聞 日本天皇及太子皇子 俱崩薨由此而言 辛亥之歲 當廿五年矣 後勘校者 知之也】

「和訳文：ある本には（継体）天皇は二十八年甲寅（534年）に崩御としている。

それをここで**二十五年辛亥（531年）崩御**としたのは。百濟本記によって記事を書いたのである。

その文にいうのに、「二十五年三月、進軍して安羅に至り、城を乞屯城を造った。この月高麗はその王、安を弑した。**また聞くところによると、日本の天皇および皇太子・皇子皆死んでしまった**」と。これによって言うと辛亥の年は二十五年にあたる。後世、調べ考える人が明らかにするだろう。）

つまり、**531年に継体大王が死んで、太子や王子も死んだということである。これは、531年が欽明即位の年とする元興寺伽藍縁起并流**

記資財帳と合致するのである。

③埼玉稻荷山鉄剣銘文に記す辛亥の年

辛亥の年（531年）に政変によりワカタケル大王が斯鬼宮で即位したとする超一級の史料が存在する。それは**埼玉稻荷山鉄剣銘文**である。

「辛亥年七月中記・・・乎獲居臣世々為杖刀人首奉事来至今**獲加多支鹵大王**寺在**斯鬼宮**時吾左治天下」

★つまり、**辛亥の年**に「親衛隊の隊長＝杖刀人首」を務めてきた「乎獲居（オワケ）臣」が、**武力行使によりワカタケルの大王即位に貢献した**ことである。

*辛亥の年は通説では雄略時代の471年とされるが、これは誤りである。

《その根拠》

- 471年には何の政変も起きていない。
- 欽明天皇はシキシマの大王ともいわれ、鉄剣銘文のシキの宮に合致する。
- 欽明天皇も弟の皇子なのでワカタケルにあたる。
- 雄略天皇の宮はハセの朝倉であり、**斯鬼宮ではない**。
- 471年は、百濟の漢城が陥落する以前であり、百濟との交流が弱く、まだ金象嵌（きんぞうがん）の鉄剣を造る技術は伝わっていない。以上。

ワカタケルの大王は欽明天皇であり、辛亥の年は471年ではなく531年である。

上で述べてきた多くの根拠から 200%間違いはない！

デニソア人を台湾沖の海底で発見

—齊藤 潔会員記—

4月5日ゼミで、ネアンデルタール人と同様に、絶滅した旧人のデニソア人が、中国のチベット高原の東端の甘肅省夏河で発見され、アジア東部迄進出していた事、そして、我々ホモ・サピエンスと交雑し、DNAを受け継いでいた事まではお話ししました。ところが、その直後の4月10日付の米科学誌サイエンスに、総合研究大学院や東京大等の国際研究チームが、台湾南西50kmの澎湖諸島（過去は陸地）近くの海底でデニソア人の男性の下顎の化石（タンパク質の解析）が発見されたと発表した。

この発見でデニソア人がアジア南部まで広範囲に分布していた事が裏付けられた(総研大・蔦谷匠助教)。(情報源:2025年4月12日毎日新聞夕刊)

縄文人は旧石器人のゲノムを受け継ぐ

4月5日ゼミでは、日本列島には、後期旧石器人(38千年前～16千年前)の残した遺跡が15千か所以上発見されているが、琉球諸島以外では人骨が未発見である事(火山による酸性土壌の為)、又、琉球諸島の旧石器人と縄文人のゲノム(全遺伝情報)分析が未発表である為、その関係が不明である旨をお話しました。ところが、4月12日NHKEテレビで放送の「古代 DNA で迫る—日本人のきた道」で、縄文人が、27千年前(後期旧石器)の白保4号人のゲノムの6割を受け継いでいることが判明したのです。尚、残りの4割は中国大陸の北方の人々のものだそうです。この白保4号人は、沖縄県石垣島の白保竿根田原洞穴遺跡(新石垣空港の滑走路北西の位置)から出土した男性の全身骨格の揃った人骨で、ゲノム情報が得られたのです。

以上。

次回7月5日ゼミ・テーマ

武蔵の古代史—小川 孝一郎会員—

以上。

以上。